

## 東京都選定歴史的建造物 近三ビルヂング 旧森五ビル(東京)



## 時空を超越する存在感

—— 後期表現派”の記念碑的作品

近三ビルは、滋賀県近江八幡に本拠を置く呉服卸商「森五商店」の東京支店社屋として昭和6年(1931年)に竣工した。それまで渡辺節建築事務所で研鑽を積んできた建築家・村野藤吾の独立後の処女作であり、以降の旺盛な建築活動の出発点——ひいてはわが国の建築史においても記念碑的な作品として位置付けられるものである。

当時の建築界を席捲するモダニズムの真っ只中において、渡辺事務所で様式建築の骨法を徹底的に学んだ村野は、このビルを手掛ける直前にヨーロッパを遊歴して新旧の建築作品を目の当たりにした。そこから生み出されたこの建物は、様式を拒否するのではなく、むしろそれを自在な表現の力にするという村野独自の立脚点を高らかに宣言するものであり“後期表現派”と呼ばれる一連の流れの源流に位置するものとなった。

竣工時の建築概要は、鉄筋コンクリート造7階建(地下1階)、延床面積4000㎡。ほぼ方形の躯体に重厚な黒褐色タイルを全面に貼った壁面と、自然光を受けて輝く縦長のガラス窓を整然と配置した造形の見事なバランスが、この建物の機能美と工芸的な美を二つながら賦与した。さらに当時のドイツ建築の鋭角とは対照的に独特の柔らかさを生起させる軒廻りのアール、また、直截なフォルムを強調しながらも薄いパラペットを庇状に渡して無限連鎖の印象を抑制した壁面と屋上の扱いなどは、村野が様式建築の美的要素を独自に咀嚼した結果、生まれてきたものとされている。

1階店舗部分のファサードには黒御影石で縁どったやはり縦長の大きな窓を歩道に向けて並べ、玄関から内部へ足を踏み入ると、壁面に厚さ30mmものトラバーチンを貼ったエントランスホールをガラスモザイクの華麗なヴォールト天井が飾っている。トラバーチンとは大理石に似たドイツ産の石材で、鉱泉の沈殿物が凝固して生成されるという。複雑な帯模様を特徴とし、大理石より堅牢で温度・湿度の変化にも影響を受けにくい。これもまた、設計者・村野が、豪華さや美観に加え、日本の風土までも熟慮した上で選定した素材だったろう。このビルに使用されているトラバーチンは黄色が主調だが、各階で微妙に色の階調を変化させてあり、その凝りようには思わず唖らされる。エントランスのガラスモザイクもドイツのピレロイ・ポッホ社から素材を輸入し、美術学校出身の奥村新太郎がデザインに腕を揮った逸品である。

もう一度、窓の話に戻ろう。雨の多い日本の風土においては、庇のない浅い窓を保護することは非常に困難だった。竣工時に採用されたジュラルミンサッシ(鉄にジュラルミンを被覆)は、その頃の工業技術の限界に挑戦する試みであり、デザインの根幹を成す要素として村野が特に心を砕いたところだったという。浅く広い窓と、それを最大限に活かすために選択された軽金属サッシは、その後のビル建築において主流を占めるに至るが、ここに現われた最新の“窓枠”こそは日本における先駆例であると同時に、確固たる方法論に裏打ちされたデザインと素材の融和という意味でも、まさに当時の世界最高水準を示していた。

さて、戦火を免れて社屋から貸事務所ビルへと用途が変更されたこの建物は、昭和31年(1956)に後部と8階部分を増築し、当初にほぼ倍する延床面積7840㎡の規模となった。なお、増改築には村野自身が携わり、施工には当初からこれに携わる竹中工務店が担当したことにも由来して、造築の違和感はまったく感じさせない。

その後、平成4年(1992)に築後60年の全面改修を経て、現在に至るが「過去と現在」「様式とモダン」「日本と西洋」といった数々のギャップを超越融和して、独自の存在として立ち続ける建物の創造をめざした稀有な建築家・村野の意志は、今に至るまで脈々と受け継がれている。



近三ビル外観(平成14年9月10日撮影)

## 着工前後から竣工まで —— 歴史と世相

|                |  |
|----------------|--|
| 昭和4年<br>(1929) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・10月. ニューヨーク株式市場大暴落。世界恐慌となる。</li> <li>・この年、建築家・村野藤吾が独立し、欧州を旅行する。</li> </ul>                                       |
| 昭和5年<br>(1930) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・4月. 日・米・英がロンドン海軍軍縮条約を締結。</li> <li>・7月. サッカーの第1回ワールドカップ大会が開催される。</li> <li>・この年、合名会社・森五商店の東京支店ビルが着工される。</li> </ul> |
| 昭和6年<br>(1931) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・5月. エンパイアステートビルが完成。</li> <li>・6月. 満州事変始まる。</li> <li>・同月. 森五ビルの上棟式が挙行される(年内竣工)。</li> </ul>                        |





近三商事株式会社

代表取締役会長

森 郁二氏

代表取締役社長

森 隆氏

## 理念の共有と継承

—— 建築への理解が生む保全意識

「戦後も大いに活躍された方ですが、現存する戦前の村野作品は特にどれもみな大切にされていると感じます。もちろん、われわれもこの建物の価値を理解し、メンテナンスには十分な努力を傾けてきました。村野先生は非常に顧客(施主)に大切にされた建築家だったのだな……よく、そんなふうに言うのですが」

森会長の言葉には、端々に建物への愛着がにじむ。同時に、設計者である村野藤吾その人に対する深い敬愛の念がある。戦後まもない学生時代に初めて村野と対面したという森会長、その印象を「余計なことは言わず、要点に限って話を進めるビジネスマンタイプ」だったと回想する。確かに、芸術家肌のタイプも多い建築家の中にあって、建築家・村野の真骨頂は、施主・施工者らの意向を正確に理解しようと努め、共有されたイメージを冷静に設計図面へと練り上げていくところにあつたといえる。小豆色とも表現される黒褐色タイルの外装と開放的な窓割は、おそらく呉服商という施主の業務イメージを近代的なビルディングにどう調和させるかという問いに対して村野が提示した大胆な解答だった。「設計を発注した先代社長と村野先生の間には、おそらく建物の印象・構成について深く共有するものがあつたのでしょう。竣工当時には、最新鋭のビルであるにもかかわらず、1階内部にすぐ接客用の広い和室(写真)が設けられていたといいます。もちろん、それも先生自らの設計によるものでした」

町々をめぐる文化の伝達者としての“近江商人”を源流とする森五商店

がまだ焼け野原のごとき東京に第一歩を踏み出すにあたり、施主と設計者が共有したイメージとはどのようなものだったろう。想像だが、江戸町人の「通好み」に応え得る洗練された美だったのではないだろうか。江戸時代後期には、流通・情報革命によって関西の「すい」と江戸の「いき」が融合した「大通」——すなわち通の中の通と呼ばれる豪商・文化人が輩出したが、彼らの身なりは見た目は地味ながら重ね着の中などに贅を尽したものだつたという。近三ビル竣工当時の建築評論に「衣服の表たる外観は渋い木綿か結城にして、裏地の室内には派手な文様の羽二重をつけたような江戸好み」(蔵田周忠)とあつたそうだが、まさに言い得て妙なる評言である。

平成4年の築後60年改修は、窓をエルミン(鋳物アルミ)製サッシュに更新するとともに、剥落の心配される外壁タイルの全面張替と更新、屋上防水と内装にまで及ぶ全面改修となつたが、このときも、躯体の安全性確認の上で、でき得る限り原設計に忠実な改修とする方針が採られた。

竣工・増築当時の材料確保・工法が困難であるため、タイルはオリジナル(240×98mm)より小型(190×75mm)の二丁掛に、横軸上下開閉式だつた窓は鋼製ステンレスカバー枠のエルミン製縦軸回転窓に変更されざるを得なかつた。しかし、開閉方式が変更されたにもかかわらず平面の美を損なわずに整列する窓、サイズ変更・全面張替となつたにもかかわらず色合いと角部分のアルまでを見事に再現した外壁——現在見るビルの印象は、なお自らが村野藤吾の作品であることを堂々と誇り高く主張しているようだ。

建築作品に対する理念の共有——ひいては“心意気”の継承とでも言おうか——大きな負担と労力を厭わず名建築に再び次代を生きる活力を吹き込んだ所有者・設計者・施工者の努力は、高い評価とともに後世に語り継がれることだろう。

文: 歴史作家 吉田茂

写真: 小野吉彦

- ① 竣工当時の近三ビル外観。当時は森五ビルという名称だつた
- ② 現在の近三ビル。増築の違和感はまったく感じさせない。
- ③ 社長室ドア。竣工時から現在までずっと使われつづけている
- ④ 水飲み場。竣工当時1階に設けられていた
- ⑤ 当時、接客用として設けられていた広い和室
- ⑥ 近三ビル入り口
- ⑦ 1階エントランスホールの天井アップ



